

ある高名な台湾人歴史研究者は、福沢諭吉が植民地主義者で台湾を蔑視したことに反発して、来日時に1万円札に両替されてもすぐに5千円札に替えてしまうという。日本では明治期の啓蒙主義者として知られる福沢諭吉であるが、台湾や韓国、中国では全くと言ってよいほど人気がない。その原因は、脱亜入欧など、彼の主張だとされる一連のアジア蔑視の言説にある。これらの言説は、福沢が創設した『時事新報』の社説に数多く掲載されている。

一度定着した福沢諭吉のイメージを覆すのは容易なことではない。学界で定説となり、メディアで流通し、教科書にも掲載されてしまうと、それを覆すのは大変な作業だ。平山洋氏は、真実の福沢諭吉の姿を復元すべく、『時事新報』の社説の総点検を行った。その結果、アジア蔑視や侵略主義を窺わせる社説はそもそも福沢が書いたものではないという結論に至った。アジア蔑視者福沢諭吉のイメージは虚像だったのである。平山氏は、この丹念な調査研究を実に20年の長きにわたり行い、すでに『福沢諭吉の真実』(2004年)、『アジア独立論者 福沢諭吉』(2012年)、『福沢諭吉とは誰か』(2017年)等でもその研究成果を明らかにしてきた。全460頁を越す本書は平山氏の社説研究の総仕上げであり、何よりまず長年にわたる氏の研究に深く敬意を表したい。

『時事新報』の社説は、現行版(戦後版)『福沢諭吉全集』では「時事新報論集」として9巻分、約1,500編が掲載されている。その中にアジア蔑視など問題をはらんだ社説が含まれるのだが、これらは福沢の筆でないものが相当混じっている。平山氏はこの点を指摘し、現行版全集の元になった大正版『福沢全集』や昭和版(戦前版)『続福沢全集』まで遡って検証した。これら二つの先行する全集は、福沢の弟子の石河幹明(1859~1943)の編纂になるものだ。

この探究の中で平山氏は、これらの全集に未収録の福沢諭吉の社説があるのではないかと気がつき、今度は『時事新報』が創刊された明治15(1882)年3月から福沢が脳卒中の発作で倒れる明治31(1898)年9月までの時期の『時事新報』社説を総ざらいする研究調査をおこなった。この時期の社説は16年半分ある。平山氏は、そのうち全集未収録分の約3,100日分の社説をマイクロフィルムから写真に撮り、外部の作業者に委託してすべてテキスト化した。その上で、語彙や文体を指標とした分析手法(比較文学者の井田進也による方法論で平山氏はこれを「井田メソッド」と呼ぶ)により、どの社説がどこまで福沢自身になる社説かを確定していくという作業を行った。想像するだけでも骨の折れる探索作業であるが、その結果およそ308日分の推定福沢直筆社説を抽出したのである(308日分とは2022年11月6日、日本思想史学会の大会の発表の場で平山氏自身が明らかにした最新の数字である)。

実は『時事新報』の社説は、福沢も含め少なくとも約10人が執筆している。福沢は明治24(1891)年9月末まで社説執筆の指導も行ってきた。平山氏の推定によれば、翌年春までの社説は福沢自身の筆によらないものであっても、福沢の個人的見解とほぼ同じであるという。この時期以降になると、福沢の意向に沿わない社説も現れ、次第にアジア蔑視で侵略主義的な

内容のものも見られるようになる。だが、平山氏が井田メソッドを用いて分析した結果、これはいずれも福沢によるものではないことが判明した。逆に、全集未収録の「植民地の経略は無用なり」や「朝鮮独立の根本を養う可し」など、侵略主義に反対する社説のほうが福沢の筆になるという判定が出るのである。なお、悪名高い「脱

亜論」(現行版全集第10巻に収録)は福沢自身による社説であるが、平山氏はこれを清国と朝鮮への不介入を提唱した論であると捉え、福沢が一貫して希望していたのは日本と同じ価値観を有する独立した朝鮮国であったと考えている。

では、アジア蔑視の社説は誰が筆者なのか。平山氏は、それは先述の石河幹明その人であると断じた。しかも石河は、これらを福沢諭吉の筆になるものとして昭和版『続福沢全集』の論集の中に入れており、それがさらに現行版『福沢全集』にも受け継がれているのである。この一連のプロセスを平山氏は綿密な考証で追跡する。本書は文献学的考証の部分がとても多いので、そこで論じられている内容の主張的部分を知るには、平山氏の既刊著作をも合わせて読むとよいだろう。上述の『福沢諭吉の真実』の中では、平山氏は石河の考え方の特徴について、①福沢と比べて天皇への崇敬心が極めて深く、②福沢のように国際関係を経済的側面から考えず、具体的な政治的勢力範囲として捉えがちであり、③中国人と朝鮮人に対する民族的偏見が非常に強いと指摘している。この3点だけでも、福沢の署名論説や無署名であっても明確に福沢真筆と分かる論説との著しい違いなのである。

『時事新報社主 福沢諭吉』の内容はこれだけではない。福沢の宗教論、興業論、移民論、交通論について、それぞれ丹念な論究がなされていて、こちらのほうもとても興味深い。各章の末尾に、当該章で解明されたことを項目で列記しているので、読者は文献学的考証の中でも道筋をきちんと確認することができる。

最後に2点述べておきたい。1点目は、井田メソッドには批判もあり、またこれを駆使した平山氏の探究成果も確かに「平山説」である。しかし、平山説に反論を行う論者には、平山氏を超える調査研究が要求される、ということだ。2点目は、平山氏の探究は結果として現行『福沢全集』の権威に疑義を呈し、また石河幹明の「不誠実」を暴露することになった。その結果、慶應義塾などの主流派研究から距離を置かれ、石河の子孫から抗議も来たという。しかし、学問とは権威によらず、不都合な真実であっても、それを見極めていくものである。平山氏はこの責務を果してきた。この真摯な探究姿勢こそ、福沢諭吉の言う「独立自尊」の精神に繋がるものではないだろうか。

